

火曜日の聖書勉強会 (マルコ9:2-9)で、弟子たちが「恐怖に震え上がった」意味について意見を盛んに交わし、聖書訳の違いをよく見てみた。新訳聖書は初期教会の書記によってギリシャ語原文から書き写されたのだが、各々の言葉の翻訳がいかに影響するかが分かる。

『弟子たちは恐怖に震え上がった』 “They quaked with fear ”
『弟子たちは恐怖に^{おちい}陥った』 “They were terrified ”
『弟子たちは非常に恐れていた』 “They were greatly afraid”

聖書には私たちが理解できない箇所がある。この話 (マルコ9:2-9)をよく考えてみよう。死人であったが生き返ってきたエリア (予言者) とモーセがどのようにして現れたのか。エリアは火の車に乗ってやって来たのか？
聖書を読む時、このような聖書の箇所をよく考えなければならない。
私たちが必要とすることを教えて下さる神を、ただ信頼して求めるのだ。

恐怖は人間が体験する部分であり、生き残るために私たちの体に埋め込まれている。

弟子たちは恐れた。このような事が彼らを恐怖に引き込んだが畏敬の念を起こさせた。弟子たちは山を駆け下らず、そこに止どまり、イエスに付き添っていた。彼らの理解をはるかに越える天上の動きを見守っていた。

私たちも同じようなことをすると思う。イエスが言われるなら踏みと留まると思う。
「さあ、山に登ろう。あなたがたが今まで見たことのないものを見せてあげよう。
すべては美しく輝いているだろう」。
この弟子たちのように、残念ながら私たちは山から降りなければならない。
そして必要とされる日常生活に追われてしまうだろう。
そして誰がなすべきか、誰がなすことができないか、そしてここで今、存在している
苦しみのための現実的な解決策は何であるのかの議論になる。

この話に出てくる弟子たちと共に少し考えてみよう。7節を見てほしい、
「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞きなさい」

ペテロ、ヨハネ、アンデレが弟子であったように、私たちはイエスの弟子である。
そしてこの言葉は私たちのためにある。
「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞きなさい」。

自然の中で過ごし、特にハイキングで遠く離れた所へ行ったことがあるだろうか。高い山、あるいは深い未開地に入ったなら、そこは天と地上の間がベールで包まれているような感覚を経験をしたかもしれない。今まで経験したよりも荒涼とした所であった。何か大きなものに見つめられているような感覚、視界が及ばない脅威ではないのだが、なにかが上に存在している。

ある人々はこのような場所を、荒涼とした所(thin place)と呼んでいる。どうしてなのか分からないのだが、そこでは私たちが神により近くなる

その日の山は、荒涼とした所ではなく開けた所であった。神は天幕をいっぱいに広げられ、神は誰であるかをかいま示された。神はイエスの洗礼の折も、十字架上でも示された。十字架上の時は、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長は「本当に、この人は神の子であった」と言った。イエスは神の子であり、私たち、教会はその証人である。

山を登っている間、(弟子たちが)山頂で説明できない光景を見て恐怖に陥り狼狽していたのは、ぞっとすることだ。山から下りてきてイエスの言うことを聞くのは難題である。

なぜ? イエスが弟子たちに、(誰にも話してはいけない)命じられたからである。マルコ福音書では、イエスが弟子たちに語られた記述はほんの数行だけである。

「人の子は、人々の手に渡され、殺される。殺されて三日後に復活する」(マルコ9:31)は容易な予告ではなかった。いつの日か、すべての僕の^{しもべ}苦^{しみ}のイエスではなくて、すべての人を御言葉、あるいは触れるだけで癒して下さる打ち勝つイエスを迎えたい。

「恐れるな、ただ信じなさい」…恐れが戸をたたく時、信仰に答えさせよう。

「食べるものを人々に与えよう」…十分あるので、持っているものを分け与えよう。

「しっかりしなさい、まさしくわたしである。恐れるな」…危険が迫っている時、イエスは私たちにやって来て下さる。

「私たちに反対しない者は、私たちの味方である」…他のキリスト者、他の宗教を持った人々、隣人と共に勤めなければならない。

「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者はすべての僕しもべになりなさい」(マルコ10:43) …

イエスの僕である私たちは、私たちの地域で仕えるために存在する。

「ともし火を持ってくるのは、升の下や寝台の下に置くためだろうか。燭台の上に置くためではないか。隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、公にならないものはない。聞く耳がある者は聞きなさい」 …

真実を覆い隠すことはことはできない。声が無視されている、あるいは消されている人々と正義のために立ち上がり、福音を述べ伝えよう。

山頂でイエスに何が起きたのかと言うより、ペテロ、ヨハネ、アンデレに何が起きたかと言う意味では、光そのものに輝くイエスの姿を見た彼らは、ヨハネの福音書冒頭の節を私たちに告げている。「光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった」。

世の光であるイエスに、私たちは十字架へ、そしてその後も従うのだ。

私たちがイエスに耳を傾けるなら、「恐れるな、持っているものを分け与えよう、共に働こう、諦めるな、みなに仕える者になろう」と告げておられる。

私たちが本当にイエスの弟子であるなら、人々が教会としての私たちを見る時、人々は信徒がこれらすべてを行っているのを見るのである。たとえ世界が闇であっても。それが変容(transfiguration, 山頂のイエスの変容)であり、外へ向かう変化である。

私たちは庶民であり、誤りを犯し、許しをこう。共に祈り、共に礼拝を守る。共に笑い、共に嘆く。イエスに従う者として、この命を生きるのだ。

私たちがなすことは、私たちが誰であるかを人々に示すことになる。

従って神の助けを願おう。そして人々を驚かすのだ。

人々が何を考えても恐れず、正義のために戦い、見知らぬ人々を歓迎する、神にそんな教会へと変容させていただくのだ。

そして天の国はすぐ近くにあると告げ知らせるのだ。

イエスの道、世の光は、私たちの道でもあるのだ。アーメン

(文責長澤猛)